Inside Murder

水面

「静粛に」
薄暗い法廷に木槌の音と男の低い声が響く。
「ただいまより裁判を開廷いたします」

七時四十五分。
「亨さん。もう四十五分よ。朝ごはんできてるから、早めに降りてきてね」
「はーい……」
寝ぼけた声で返事は帰ってきたが、階段を降りる音は聞こえてこない。
「お味噌汁、冷めちゃうわよ」
もう一度階段の下から声をかけてみる。
「今いくよ」
そろそろかな、と思いご飯と味噌汁を茶碗によそう。少しおぼつかない足取りで階下へと降りてくる足音がする。
「ごめんごめん。まだ冷めてないよな。いただきます」
「はい、どうぞ」
一口目にぬか漬けに箸を伸ばす。
「うん、これうまいな。どこで買ったの？」
「うちのお母さんが送ってくれたのよ。最近ぬか漬けづくりに凝ってるらしくて。まだいっぱいあるからどんどん食べてね」
「もらうだけじゃ悪いから、このまえうちのおふくろから届いたみかん、まだけっこうあったよな？　あれいくつか送っといて」
「わかった。お義母さん、二人じゃ食べきれないほど送ってくださったものね」
時計の針が七時を指そうとしている。
「それにしても、毎朝ぎりぎりに起きてくるんだから」
「いやぁ。昔からどうも朝は弱くってさ」
「私が起こさなかったらどうするのよ」
「遅刻決定だな」
そういいながら笑う。
「そういえば、回覧板みてくれた？」
「えっ、ごめん。なんだっけ？」
「工事の話。今度エレベーターの点検があるから木曜日の九時から十一時までエレベーター止まっちゃうんですって」
「まあ、俺は会社だし、お前も特に出かける用事もないだろうから関係ないだろ」
「それもそうね。じゃあお隣に回しておくわ」
やっと冷めたという風に、味噌汁を一気に口の中に流し込む。
「ごちそうさまでした」
「はい、お粗末様でした」
もうあまり悠長にしている暇もないので、着替えるために二階へと戻っていく。
私は二人分の食器を流しに置き、器を水に浸す。冬の朝、蛇口から流れ出す水は冷たい。一粒の米が残った彼のお茶碗。残された米粒が水にさらわれていく。茶碗から溢れ出した水たちがシンクの真ん中にぽっかりと開いたような黒い穴へと吸い込まれていく。
なんの変哲もない夫婦の、なんの変哲もない朝。なんの変哲もない一日がまた始まって、終わるはずだった。

気が付くと私は証言台に立っていた。何がどうなっているのかわからない。普通なら誘拐や拉致を疑うが、どうも見知らぬ場所に連れてこられたようには思わなかった。それだからだろうか、目が覚めると見知らぬ場所にいるという状況にも関わらず妙に冷静な自分がいた。しかし家ではないし、私は裁判所に行ったこともない。ただ確かなのは、私が立たされているのは証言台で、裁判官の席には真っ白な法服を来た男が一人いること。裁判官といえば黒い法衣を着ているのが普通だが、目の前の男が纏うのは白だった。裁判所らしき場所の中にはご丁寧に、傍聴席や検事席なども用意されているが人の姿はない。

「ここはどこなの？」

「……」

白い法服の男は答えない。

「私に何をするつもりなの？」

返答もなくこちらを見据える男にいらだちを覚え、つい語気を荒げてしまった。

「静粛に」

男が厳粛な面持ちでようやく口を開いた。

「ここはあなたの中ですよ」

「私の中？」

「そうです。あなたの心の中。心の中で起きた事件は心の中で裁かなければなりません」

そういうと男は改まったようにこほんと咳払いと一つし、神妙な動作で木槌を二回振り下ろした。

「只今より『心の中殺人事件』の裁判を開廷いたします」

木槌の音と男の声が閉塞的な法廷の空気を揺らす。木と木がぶつかった音が空気を震わせ、その振動が私にまで届いたように感じた。

「被告人の罪状を読み上げます。」

「ちょっと待ってよ！」

先ほどの反省も忘れ、思わず叫んだ。

「裁判っていったい何の裁判なの？　それにここにはあなたと私しかいないじゃない」

男が何をじっとこちらを見つめ返す。

「だから言っているでしょう、『心の中殺人事件』の裁判です。あなたが夫を心の中で計二十七回殺した凄惨な事件の、です」

「私が亨さんを殺したですって？」

「そうです、覚えてないとは言わせませんよ」

男は大きく息を吸い込み、手元の資料を読み上げ始める。

「四月四日、寝ている被害者の首を絞め殺害。五月十日、被害者の夕食にナフタリンを故意に混入させ殺害。六月六日、睡眠薬で被害者を眠らせ、風呂場で顔を水の中に沈め溺死させ殺害。七月十九日、包丁で被害者を刺し殺害。九月三日、ベランダから被害者を突き落とし殺害。」顔からさあっと血の気が引くのを感じた。

「十月二十六日、リビングで」

「もうやめて！」

証言台をばんっと叩いて立ち上がる。

「もういい…」

「あなたは被告人なんですよ、この事件の」

頭の中で被告人、殺害、殺人、被害者。そんな文字がぐるぐると廻って思考がまとまらない。

「いい加減認められたらどうですか？　ご自分の罪を」

罪、その言葉に私の中で何かが、ちょうど熟れた鬼灯のように、弾けた。

「ええ、殺したわよ。彼を」

沈んだ首をもたげ、男を睨みつける。

「だからといって、何が悪いの？」

口から言い訳のような言葉が濁流のように流れ出る。

「彼を殺す妄想をしただけじゃない、実際に殺したわけじゃないわ。誰だって誰かを殺したくなる時があるでしょう？　みんな心の中で憎いやつを殺したことなんて、一度や二度じゃないほどあるはずよ。私だけじゃないわ」

一気に酸素を放って、肩が激しく上下する。

「おや、みんながしているからいいと？」

「そういうわけじゃないけど……」

「あなたはみんなが万引きするなら万引きはしていいと？　物を壊すなら壊していいとみんなが暴力をふるうならふるってもいいと？」

何か言い返そうと思ったが言葉が見つからない。言いよどんでいると再び男が口を開く。

「みんなが人を殺すなら殺してもいい、そうお考えで？」

そういうわけじゃない。そういうわけじゃないけど。

「だって実際に殺すのと、想像で殺すのは全然違うじゃない。誰にも迷惑はかけないし、現実で誰かが死ぬわけでもないのよ？」

はあ、と男がため息を一つ。

「誰にも迷惑をかけれなければ罪ではないのですか？　ここは裁判所ですが、罪を裁くだけではありません。あなたの罪への認識を再確認するのです。」

言っている意味が分からない。

「どういうことなの？」

くるっと私に背を向ける。

「あなたが罪だと思えばそれは罪で、罪でないと思えば

それは罪ではないのです」
私のほうを向き直って言う。
「つまり、この裁判はあなたが『心の中で夫を殺すこと』を罪だと感じたから開かれたのです。」
私が夫を殺すことに罪の意識を抱いていた？
そんなはずはないだって亨さんは、
「今そんなことはないと思ったでしょう？」
「えっ」
「そうあなたは普段何も思わず、何も感じず、旦那さんのことを心の中で殺している。悪意なき殺人は裁けません。しかしあなたは先日、罪の意識をもってしまったのです。忘れていたことを思い出したでしょう」
そうなのか？　そんなことあったのだろうか？　混乱、そして沈黙。
「でももうこの裁判が開かれることはないでしょう」

がちゃっと音がして扉が開く。
「ただいまー」
玄関から疲れた声が聞こえる。
「おかえりなさい。お疲れ様」
「もうほんっと疲れたよ……」
愚痴をこぼしながら階段をゆっくりと上がっていく後姿を見送る。台所に移動し、電子レンジに器を入れてボタンを押す。着替え終わった夫が降りてくる足音がする。
「今日の晩御飯何？」
「今日は酢豚よ」
おっという顔をして旦那が台所を覗き込む。
「おっ、うまそうだな。パイナップル入ってる？」
「入れてないわよ。あなた文句言うじゃない」
「だってさあ、許せなくないか？　料理に果物入れるなんて」
「私は好きだけどねえ」
彼は微笑んでパイナップル抜きの酢豚を口に運んだ。